

1992年(平成4年)6月2日(火曜日)

探検 発見 コラムランド

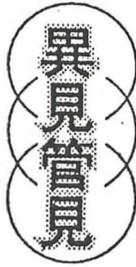
村おこし図書館

レヴィ・ストロースの回想を読んでいたら「博士論文を執筆したのは、亡命先のニューヨーク市立図書館」とあってびっくりした。彼の博士論文は『親族の基本構造』。フランスや世界各地の人類学者の調査報告を縦横に参照した大著である。参考文献は六千点あまり。借り手の滅多にない専門書まで、丹念に収集していたに違いない図書館の根性の入り方に感心する。そう、これが文化だ。

それにひきかえ、日本の公立図書館は情けない。基本的と思われる図書すら揃っていないところはあまりなく、専門の論文を書くなど思いもよらない。人手が足りない。スペースもないので古い本を捨てているなどという噂を聞くと、暗い気持ちになる。

図書館は、いい本も駄目な本も、出版された本を残らず保存しておくのが任務である。情報のタイムカプセルなのだ。それなのに中途半端な図書館ばかり増え、ここに行けば必ずあるという信頼できる場所がない。書店は新刊であふれているが、数カ月前の

橋爪 大三郎



本がもう見当たらない。数年すれば品切れ・絶版になる。そんないま、百年、千年の展望で本を集める図書館が頑張らないと、日本の文化はあぶくのように危ういのだ。

スペース。それと人手。これさえあれば図書館は作れる。が、都会では無理。そこで、村起こし図書館というのを考えた。

まず広大な敷地に廃材で建物を建て、書架を確保する。つぎに日本中の古本を集めて、片っ端から登録する。重複したら、外国に寄贈しよう。手に入りにくいものはコピーでもいいから、とにかく本と名のつく本を集めることを目標にするのだ。そうすれば、地元雇用が生まれる。閲覧者が泊まりがけでやって来る。大学だって招致できるかもしれない。こんな図書館が、十や二十あってもいい。

自分が死んだあと、そんな図書館に蔵書を寄贈したいものだ——無駄に買い溜めた本に埋もれ、そつぷぶやくのは私ばかりではあるまじ。

(東工大助教授)

1992年(平成4年)6月30日(火曜日)

探検 発見 コラムランド

怪名の戒

死ねば戒名をつける——それが日本人の常識だ。でも、そうするとお経にも書いてない。前からおかしいと思っていたら、島田裕巳さんが「戒名(法蔵館)という本でその辺をすっきり書いてくれた。江戸幕府の命令のかた、お坊さんは葬式ぐらいしかやることになくなってしまった。お寺の経営も大変だから、最近では戒名料も値上がりするばかり。無信心だった生前のツケを一度に払われる仕組みになっている。

これは免罪符とよく似ていると私は思う。天国への切符を売って資金集めという、安直で聖書の教えに反するやり方を、ルターが厳しく批判した。こうして始まった宗教改革が、ヨーロッパ近代をのみ出した。戒名も仏教の教えに根拠をもたないはず。そんなものが幅をきかせているから、信仰の自由も個人の精神的自立もない近代以前の状態で、日本は足踏みしていると言えないか。

橋爪 大三郎



い。詳しい事情はわからないが、ひとつよい話を耳にした。お寺とけんかした創価学会の人たちが、戒名もお坊さんの読経もなしでお葬式をあげているという。瓢箪から駒かもしれないが、日本仏教の歴史に残る快挙だと思ふ。

もともと釈尊は、出家者が世俗の仕事(たとえば葬式)にタッチすることを禁止していた。だから、お坊さんが葬式に関係するのがそもそも変である。戒名(死んだあと仏弟子としての新しい名前をつける制度)も、中国か日本で勝手にこしらえたもの。仏教の本質とまったく関係がない。こういう当たり前のことに口をつぐんでいる仏教界は、墮落していると言われても仕方がない。

釈尊の教えを信ずる親戚友人が集まって、故人をしのぶ。冥福を祈ってお経を読む。これではないか。そういう現代生活にふさわしいお葬式スタイルが、うまれつつあるのだとすればすばらしい。

(社会学者)

1992年(平成4年)7月28日(火曜日)

探検 発見 コラムランド

「集結婚」考

女優の桜田淳子さんや元オリ
ンピック選手の山崎浩子さんら
が統一教会に入信し、近く集団
結婚式を挙げるというので、す
っかり話題になっている。
成人に達した男女が自分の意
思で結婚を決めたのなら、どう
いうやり方でだれと結婚式を挙
げようと本人の自由だ。第三者
がとやかく言うすじあいはな
い。むしろ、なぜ人々がこれほ
ど今回の件に興味をひかれたのか、のほう
が問題だ。

教育も収入もある三十歳前後の女性たち。
それなりに厳格に育てられ、異性との交際が
不器用だ。消費社会の軽いノリにもついてい
けない。いざ結婚相手を探すと困って
しまう。そんなタイプの彼女らが、桜田さん
や山崎さんに自分の姿をダブらせてみたとし
ても不思議はない。

教祖が結婚相手を決める。それで条件もつ
りあい、お互いに相手を気に入って幸せにな
れるなら、こんなうまい話はない。失



橋爪 大三郎

われたお見合いの理想像が、装い新た
によりがえったのである。

集団結婚式が、伝統的なお見合いと違つた
は、家族の反対を押し切っても、という点。
昔のお見合いは親が勧め、娘は恥ずかしそう
にうなずいた。もうそんなのははやらぬ。
だれだって親と関係なく、自分でものごとを
決めたい。自分ひとりで親と対決するほど我
の強くない子の場合、宗教は手ごころなよりど
ころになる。

統一教会は冷戦の啓とし子で、共産主義
悪の教義を掲げてきた。それで多くの日本人
は拒絶反応を示した。ところが今回を機に、
人々は統一教会に対して、自己啓発セミナー
+結婚紹介産業みたいなイメージを抱きはじめ
めた。これが教会の実像とどこまで合致して
いるのか、私は知らない。ただ、そうしたイ
メージに、どこか中途半端な独立心をもった
女性たちの姿が投影されているのは確かだと
思うのである。

(社会学者)

1992年(平成4年)9月1日(火曜日)

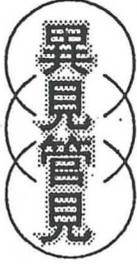
探検 発見 コラムランド

中国のロック

中国のナンバーワン・ロックシ
ンガー、崔健(ツイ・シェン)が
とうとう来日した。七月三十一日、
彼が出演するコンサートがある
というのでさっそく聴きに行った。
と言っても、日本ではまったく
無名の彼。だいたい中国にロック
があるのかい、と言われてしま
う。まず中国の音楽事情から
説明しないといけない。

崔健が、中国最初のシンガー・ソングライ
ターとしてめきめき頭角を現したのは一九八
〇年代前半。改革開放政策が始まって、間も
なくのことだ。それまで禁止同然だったポピ
ュラー音楽に、人びとはわっと飛びついた。
そんななか、外国物に飽き足らない若い人び
との間で、中国自前のロックンローラーとし
て圧倒的な支持を集めたのが彼だった。

甘えた小金持ちの中高生相手の日本と違っ
て、中国のロックは筋金入りだ。中国の人び
とに、いまの社会は矛盾の塊に見える。そう
した怒りととまどいの心情を、崔健はストレ
ートにシャウトする。アルバム「新長



橋爪 大三郎

征路上の揺籃(やおん)は、どれ
だけ売れたか見当もつかない。香港・台湾や
海外にも、彼の名は囁ひびいている。

こんなわけでただでさえ自ざわりな存在な
のに、崔健は民主化運動のさなか天安門広場
でロックを演奏したりして、すっかりにらま
れてしまった。そのあと少しおとなしくして
いたが、最近またほろほろ活動できるよう
になったらしいので、私は喜んでいる。

政治の話はさておき、よいものはい。彼
にはロックの魂がある。コンサート会場には
中国人留学生も大勢つめかかっていた。話し
かけてみると、なんと勤め先の東工大の学生さ
んだったりして、びっくりである。

日本の聴衆はこんな事情を知る由もなへ、
崔健の熱演にもボカンとしている。ワールド
ミュージックがブームと言うけれど、まだま
だ日本は欧米一辺倒。ここでじっくらのア
アの音楽に耳を傾けてはどうだろう。

(社会学者)

1992年(平成4年)10月6日(火曜日)

探検 発見 コラムランド

天津の十日間

天津です。目に飛びこんでくるのは、よっきりそびえる電視(テレビ)塔だ。京都タワーの親分みたいな形で、地上四一五、東洋一の高さを誇る。展望台からは人口一千万人の天津市が一望できる。

九月中旬、この電視塔の近くに宿をとった私は、迎よく、天津社会科学院の王輝院長と連絡をとることができた。天津市の幹部で社会学者でもある彼は、飛び入りで押しかけた私の話を、じつに熱心に聞いてくれる。そしてまたたく間に、社会学研究所、日本研究所、南开大学の皆さんとの三回の座談会や、講演会のスケジュールを手配してしまっただけで、思いがけず講演することになってしまった。困った。とりあえず「中日両国現代化的比較研究」という題で話すことにする。

ここ数年、中国の変化はいちじるしい。北京ではあちこちに新しい高層ビルが目立つ。天津港の近くにも、塩田を埋め立てた巨大な「開発区」ができて、外資や合併の企業がたくさん進出している。北京-天

橋爪大三郎

異見管見

津は、先ごろ開通した高速道路を飛ばせば一時間半あまり。テレビほどのチャンネルも、経済改革のニュースや株式豆知識みたいな番組を、これでもかこれでもかと流している。

講演会には、各分野から四十人ほどの学者さんが聴きにみえた。なるべく中国語で話そうとしたが、すぐよれてタウン、通訳の方をお願いする。報告のあと質疑応答も活発で、何でも自由に議論できる雰囲気である。改革の成功を願う人びとの熱気が感じられた。

そんな日程の合間をぬって、近くの「青少年児童活動中心」に知り合いの小学生の女の子と遊びに行った。敷地は広いが、設備はどちらかと言えば貧弱である。でも彼女は「なんでもあるもん」と大満足だ。私は、阪神パーク(今でもあるのだろうか)を羨しみにしていた、子供のころを思い出した。そして、中国の経済改革が人びとの心の幸せに結びつくことを願った。

(社会学者)

1992年(平成4年)11月10日(火曜日)

探検 発見 コラムランド

異見管見

橋爪 大三郎

民主党のビル・クリントン候補が大統領に選ばれた。クリントン氏は四十六歳、副大統領候補のゴア氏は四十四歳。ベビーブーマー(団塊の世代)がトップに躍り出た。大統領選を見ていると、うらやましいなあと思ってしまう。政治家が、国民のほうを向いている。選挙民も手弁当で運動を支えている。言論を武器に政策で勝負するルールがはっきりしている。

うらやましいな、若い大統領

人が日本にいたとして、果たしてあの若さで首相になれるだろうか。四十年代はおろか、五十代でも無理だろう。当選回数を重ねて派閥のリーダーになるというお決まりのコースでは、頂点に立つまでに人生のあらかたを擦り減らしてしまう。これでは人材が寄りつきにくい。政治はいまや、3K職種になってしまっている。

いまの日本の政治の仕組みでは、巧妙に政治資金をかき集め、子分に選金をばらまくタイプの政治家がのしかかっている。その手口をかぎつけた右翼を、口封じしようとしたのが皇民党事件である。

こういう仕組みをほうっておいて、なんにも手を打たないとしたら国民の怠慢である。金丸が悪い、竹下が悪いと言ってすむ問題でない。選挙のやり方、政治資金の集め方、国会のあり方……を手直しする。派閥をつくらせたり、裏金に手を触れさせたりしなくてもすむようにする。日本のクリントンたちにチャンスを与えるために、制度が政治家を悪くしている現実をまっすぐ見すえよう。団塊の世代は何をしているのか、と私は言いたい。

(社会学者)

1992年(平成4年)12月8日(火曜日)

探検 発見 コラムランド

異見発見

橋爪 大三郎

ビートルズデビューから30年...

中学のころ海のそばに住んでいた私は、水泳を日課にしていた。ある夏突然、海水浴場のスピーカーから、妙に耳なれぬ曲が鳴り続けはじめた。それがビートルズだった。

一九六二年の十月、シングル盤『ラヴ・ミー・ドゥー』でデビューを告げたビートルズは、まだたく間に旋風を巻き起こす。プームは欧州からアメリカへ飛び火し、それまでのポピュラー音楽

の記録を残らず書きかえていった。ファッションやアートに限らず、六〇年代を丸ごと象徴するものがビートルズだ。今年、ビートルズのデビュー三十周年にあたる。わが日本ポピュラー音楽学会(三年前に結成され、私が事務局を担当している)も、さっそく記念シンポジウムを企画した。

十一月の末、百人近くの会員が東京大に集まった学会大会の二日目。ま

ず立ったロック・オールディーズのレコードコレクター、杉原泰蔵さんが、ビートルズ現象をファンの視点から考察。ジャズ批評家の後藤雅洋さんは、団塊の世代のビートルズへのこだわりを説明する。難波弘之さんは、ミュージシャンの立場から、スタジオ録音技術の進歩とロックのアート化を検証。若いロック世代の室田尚子さんは、ビートルズがどういう過去の音楽に聞こえるかを証言した。その一曲も思い出深いビートルズ時代の私は、それがはや学会のテーマとなる時の流れに愕然とする。

(社会学者)

書籍紹介: 小室直樹の政治思想 46判・237頁・1800円

書籍紹介: 小室直樹の政治思想 46判・238頁・2060円

簡潔で説得的な言葉で書かれた一級の民主主義論

小室直樹 著

民主主義は最高の政治制度である 橋爪大三郎 著

小室直樹への謝辞

民主主義論は、小室直樹の政治思想を、簡潔で説得的な言葉で書かれた一級の民主主義論である。...

第1954号